

このページは、森林研究センターホームページに PDF ファイルで掲載されています

※※※山武の森から※※※

明けましておめでとうございます。

山武の森から、新春のお便りをお届けします。

ここ森林研究センターの敷地内の森は約10ヘクタールほどですが、谷津田に沿った木漏れ陽のさす南側の斜面林には、渡り鳥のアオジなども訪れています。また、里山公開講座に参加したボランティアの方々と一緒に整備したスギ林、広葉樹林、竹林は、それぞれ健全で明るい林となって春を迎えようとしています。

ところで、昨年10月20日の台風23号による豪雨など自然災害の多発した年でありました。

台風の上陸が10回にも及んだことは地球温暖化による異常気象の影響なのかもしれませんが、地球温暖化が自然環境へ与える影響が大きいことから、この対策が21世紀最大の課題となっております。

県では、原因となる二酸化炭素などの温室効果ガスを削減することを目標として「千葉県地球温暖化防止計画」を平成12年に策定し、対策を進めているところです。

また、国においても森林を二酸化炭素の吸収源として位置付け、平成15年から「地球温暖化防止森林吸収減10ヵ年対策」が5つの枠組みで進められています。

当森林研究センターにおいてもこの温暖化対策の枠組みに関連する研究をしておりますので紹介します。研究の進展に協力いただければと思います。

(対策の枠組みと課題)

① 健全な森林の整備

：長伐期化に対応した人工林管理技術の開発

② 保安林等の適切な管理・保全の推進

：マテバシイ林の山地保全型管理技術の確立

③ 木材及び木材バイオマス利用の推進

：木質バイオマスから生産される炭化物の用途開発

④ 国民参加の森林づくり等の推進

：里山における森林アメニティ評価技術の確立

⑤ 吸収量の報告・検証体制の強化

：森林吸収源計測・活用体制整備強化事業等です。

森林は整備・健全化することにより、地球温暖化防止をはじめ、水源涵養さらには山地保全などに大きな役割を果たすものです。

「みんなで育てる ちばの森林」を目標に森林研究センターは今年も県民の皆様の声を聞きながら業務を進めてまいりたいと思っておりますので宜しくお願いします。

なお、1月21日には、第2回目の里山公開講座を含む試験研究成果発表会が森林研究センターとさんぶの森文化ホールで開催されます。この機会に是非皆様方のお出でをお待ちしております。



里山公開講座の受講生

森林研究センター長 田中 元

このページは、森林研究センターホームページに PDF ファイルで掲載されています

スギ花粉の飛散量を少なくするための新たな取り組み

もうすぐ花粉症の人には大敵のスギ花粉のシーズンですね。当センターでは花粉飛散量の予測、花粉の少ないスギや全く花粉が出ないスギの開発などさまざまな観点から、この対策の研究を進めています。その一つとして花粉を飛ばす雄花の着花量を減らす試験を行っています。

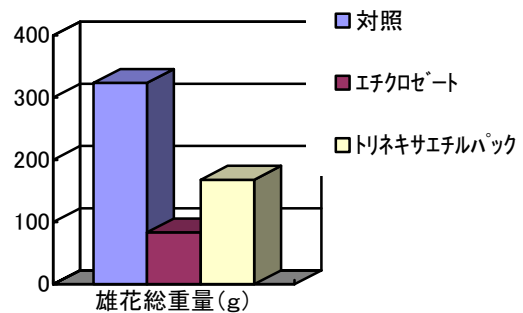
スギの雄花のもととなる細胞は毎年7月ごろに形成されます（この現象は花芽分化と呼ばれています）。したがって、この時期に雄花となる細胞の形成を少しでも抑えることができれば、翌春の雄花の着花量を減らすことができます。このような細胞の変化や形成に関与する物質があり、それらは植物生長調節剤と呼ばれています。その中でトリネキサパックエチル、エチクロゼートという物質は、この時期にスギの葉面に散布すると花芽分化を抑える効果があります。

そこで、これら物質の葉面散布試験を実際のスギ林で行いました。試験を行ったのは安房郡丸山町にある林道沿いの22年生スギ林です。平成15年の7月上旬、動力噴霧器を用いて林縁木に対し50ppm濃度の両植物成長調節剤の水溶液を散布しました。散布本数はともに18本です。なお、この試験の5日前にジベレリンという逆に花芽分化を促進する植物成長調節剤（50ppm水溶液）を散布しました。この時期に雨が多く気温があまり上がらないと花芽分化が進まないため、それによる試験の失敗を防ぐためです（実際、この年の7月はこのような気象条件だったため、翌春の雄花量はどこも少なくなりました）。右の写真は散布翌年（平成16年）1月の試験地の状況です。このように見た目でも、トリネキサパックエチル、エチクロゼートを散布した木

の雄花は少なくなりました。そこで、これらの散布木から雄花の着き具合が標準的な枝を平均6本選んで切り取り、そこから雄花を分離、乾燥させて重量を計測しました。この際、対照としてジベレリンのみ散布した木についても雄花重量の計測を行いました（14本）。

結果は下のグラフのとおりで、トリネキサパックエチル、エチクロゼートを散布することにより雄花の着花量が1/2から1/3に減少しました。どのような時期に散布をすれば効果が大きいか、また最適な濃度はどれくらいかなどこの技術が実用化するためにはもう少し時間がかかりますが、今回の試験のように日当たりが良くて雄花を着けやすく、しかも人の目にも付きやすい林縁木に散布するだけでも、効果があるのではないかと考えています。

(森林保全研究室 遠藤良太)



FOREST LETTER 千葉県森林研究センター

このページは、森林研究センターホームページに PDF ファイルで掲載されています

里山の森づくりアンケート

現在、私たち森林研究センターでは「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」の施行を受けて、里山林整備の指針づくりを進めています。

その一環として、昨年6月から9月にかけて里山活動協定の認定を受けた県内22箇所21団体の活動地を訪れ、里山林整備の現状を調査し、里山整備の疑問等に答える「里山巡回相談」を県みどり推進課（社）千葉県緑化推進委員会と合同で行いました。

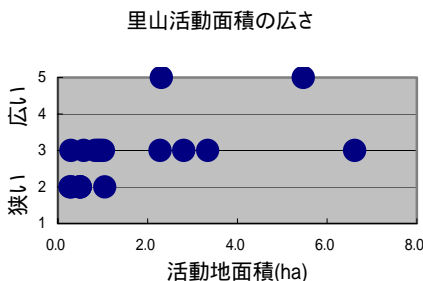
紹介するアンケート結果は、この巡回相談のときに、各活動団体の活動状況と活動上の要望内容を把握するために「森づくり技術」について行ったものです。アンケートには18団体から回答を得られました。今回は、その中から活動している里山の状況についての設問の結果を抜粋して紹介します。

「問 活動場所に生育している樹木を選んでください。多い順に1から番号をつけてください。」回答順位を高い順に5～1点で点数化して平均点を計算したものが下表です。

スギ・ヒノキ	落葉広葉樹	常緑広葉樹	タケ	マツ
3.4	2.9	3.1	2.9	0.3

マツを除く各樹種ともほぼ同値で、いろいろな里山林が活動地となっていることが判ります。

「問 活動している里山の広さは十分ですか、狭いですか。」選択された回答を5段階に点数化して（広すぎる：5点、少し広い：4点、十分：3点、少し狭い：2点、狭い1点）活動協定の面積との関係を下図に示しました。

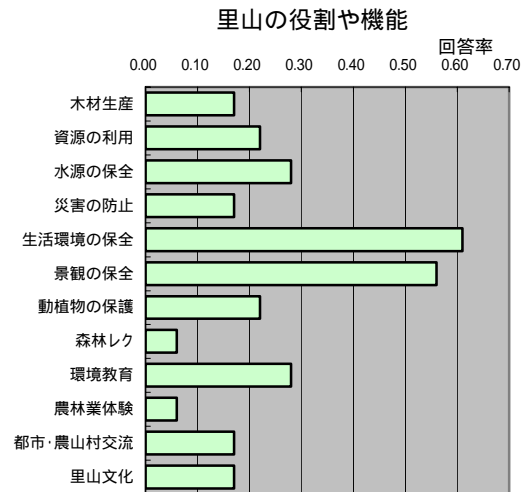


総平均は“2.9点”で活動地の広さは“十分”との結果になりました。活動協定の面積は0.27haから6.62haまであり、56%の団体が“十分”、次いで“少し狭い”33%、“広すぎる”11%の回答率です。この回答結果の“十分”には、現在、活動地全体

へ活動が及ぶ途上で、これから広・狭を実感する団体が含まれているものと考えています。

「問 里山が荒廃していると言われています。荒廃の有無と原因を記入してください。」荒廃の有無については8割を超える団体が“荒廃あり”と回答しました。“荒廃なし”とした団体は、里山活動により活動地の荒廃がなくなったと回答しています。荒廃原因としての回答は“手入れ不足”“人手不足”“森林経営困難”の3点に集約されました。これらの回答は里山活動協定の認定を受けた団体の“自らの手で里山をよくしたい”との意識をよく表していると思います。

「問 里山の役割や機能で何が重要と考えますか。重要と思うもの3つ以内にしてください。」下図は項目ごとの回答団体数に対する回答率です。



「生活環境の保全」「景観の保全」の2項目の回答が5割を超えています。次いで、「水源の保全」「環境教育」が高い回答率となりました。

現在、里山林整備の現場ではササやタケの下刈り・整理伐作業を中心に森づくりが行われています。今後の里山活動は、各団体の目指す里山の役割や機能をより発揮するため、計画的で具体的な整備方向を見出す段階に進んでいくことと思います。

整備した里山が実際に眼に見える、そして将来の里山の姿も見えてくる。そういった里山整備が、今後の活動促進のために大切なことと考えています。

（環境機能研究室 高橋孝之）

FOREST LETTER 千葉県森林研究センター

このページは、森林研究センターホームページに PDF ファイルで掲載されています

森林研究センターの動き

第42回試験研究成果発表会のお知らせ

千葉県農林水産技術会議主催の第42回試験研究成果発表会（林業部門）が下記の日程で開催されます。ぜひ皆様のご参加をお待ちしております。

記

- 日時：平成17年1月21日（金）
- 場所：10時～12時 森林研究センター
13時～16時30分
さんぶの森文化ホール
- 発表課題
(1)「里山の森づくりを考える一整備事例の現地検討」 （森林研究センターで実施）
(2)「房総丘陵のヒメコマツ保全の取り組み」
（さんぶの森文化ホールで実施、以下同じ）
(3)「スギ・ケヤキ混交林の造成一植栽後9年間の成長」
(4)「里山林における森林浴効果」
(5)「キノコ廃培地の流通・利用の実態一キノコ栽培後の培地はどのように使われているか」
(6)「千葉県における木質バイオマス利活用の現状」
- 入場は無料です。詳細は森林研究センター総務課にお尋ねください。

試験研究課題の評価

千葉県試験研究機関評価委員会森林研究センター課題評価専門部会（部会長 東京大学大学院山本博一教授）による平成16年度の試験研究課題評価が、平成16年10月14日（第1回、当センター）及び同11月5日（第2回、県庁）の両日行われました。今回の対象課題は、「マツノマダラカミキリ後食防止剤の予防効果向上試験」など5課題でした。

特許審査請求

平成16年11月15日、「チアミン（ビタミンB1）を高濃度に含有したシイタケの作出方法」について、特許庁に特許審査請求を行いました。

主な会議・行事（H16.10～12）

- 日本林学会関東支部大会
平成16年10月6日、ルミエール府中（府中市）にて開催され、当センターからは7名が出席、発表した。
- 海外出張
平成16年10月16日～24日、総谷研究員が、森林利用の調査のため、ヨーロッパに出張した。
- 関東・中部林業試験研究機関連絡協議会研究企画実務者会議
平成16年10月29日、都道府県会館にて開催され、松原次長が出席した。席上、傘下にある6専門部会の改革が議論された。
- 千葉県優良木材展示会
平成16年11月18日、千葉県木材市場協同組合（東金市）にて開催され、田中センター長、松原次長が出席した。これに先立つ審査では、松原次長、佐野主席専技が協力した。
- 農林技術調整会議林業分科会
平成16年11月28日、県庁にて開催され、センター長、次長、各室長、担当研究員が出席した。席上、第42回試験研究成果発表会（林業部門）の発表課題と内容が議論された。
- 職務発明審査会
平成16年12月14日、県庁にて開催され、田中センター長、太田室長、寺嶋主席研究員が出席した。

（編集責任 松原 功）